

校内研究を学校づくりの核に 「とことん考える」子どもを育む

山形県 天童市立高掬小学校

天童市立高掬小学校では、意欲的に日々のくらしや学びに取り組み、とことん考えて自分の言葉で思いを伝えられる子どもの育成を目指す。校内研究を学校づくりの柱と位置付け、教師一丸となって取り組んでいる。

■ 学校概要

児童数203人。8学級（うち特別支援学級1）。
教員数18人。40代が多い。
*取材時（2010年3月）のもの

■ 研究の方向性

- 子どもが納得するまで考え、自ら問いや答えを追求する姿勢を育む
- **すべての教育活動で、目指す子どもの姿に迫る**という考えから、校内研究を学校づくりの柱に
- 教師も常により良い方法を考え続けることを重視
- 授業研究会は、目指す子どもの姿・授業づくりのポイントの共有や、振り返りの場と位置付ける

■ 取り組みと成果

- 事前研究会では授業者以外の教師も指導案づくりから参加する
 》「**みんなの授業**」という**一体感**を生み、事後研究会でも「授業者への評価」にならない
- 事後研究会は「授業を語る会」とし、自由に語り合える雰囲気をつくる
 》自分の授業として捉えられるので感じたことを言いやすく、建設的な議論になる

■ 成果を支える要因

- 研究による成果を教師自身が実感しながら進める
- 職員室で子どもの名前を出して様子を話すなど、管理職が**子どもの話をしやすい雰囲気**をつくる
- 教師全員で全校児童を見取る方針

S c h o o l D a t a

◎周囲に畑が広がる静かな環境に位置する。研究主題を「学び合う子どもが育つ学習活動」と設定し、子ども同士が主体的に学び合う授業づくりを進める。



校長 村形啓行先生

児童数 197人 学級数 7学級（うち特別支援学級1）

所在地 〒994-0068 山形県天童市大字高掬北239

TEL 023-655-2051

URL <http://www.takadama.jp/>

公開研究会 2010年度の日程未定

*2010年4月時点

つづけたくなる授業研究

◎課題と研究の方向性

「待つ指導」を徹底

高嶺小学校は、「くらしや学びを自分たちでつくり出す子ども育成」と「学級の全員が納得するまでとことん考える授業づくり」を目指す。「くらしや学びをつくる」とは、納得のいくまで考え、日常生活や学びに主体的にかかわっていくことだと、同校では定義している。その背景について、村形啓行校長は次のように語る。

「本校には素直で友だちと仲良くできる子どもが多いのですが、周囲の意見を踏まえてもつとよく考えようとする積極性や、友だちとは違う自分の考えを強く主張する力に弱さを感じます。児童数が少なく、皆が顔見知りのため、言葉に出さなくても気持ちに通じやすいこともあるのでしよう。友だちとぶつかることを恐れて、意見を控える子どももいます。その殻を破るために、納得するまで考えて問いや答えを自らつくり出し、それを伝えていく力を育てたいと考えています」

そのために教師が心掛けるのが「待つ」指導だ。子どもの答えがねらいから外れたとしても、「違うよ」と言うのではなく、「この部分も見てもっと考えてごらん」と、更に考えを深めるように促す。研究主任の青山紀子先生（当時）は次のように説明する。

「解決法を教えるのは簡単ですが、子どもが考え抜くまで辛抱強く待ちます。どのような場面に直面しても、自分で考え、納得して主体的に取り組む姿勢を身に付けさせたいと考えるからです」

目指す子ども像は教育活動のさまざまな場面で育つ、という考えから、こうした指導は給食や清掃、行事など学校生活全般に及ぶ。教務主任の堀川一男先生（当時）は次のように話す。

「例えば、卒業式では、卒業式とは何か、どのような気持ちで臨むべきかを問い掛けます。最初は目的意識が希薄で返事がありませんでした。最初は、何度も対話するうちに、6年生では『お世話になった先生や下級生、両親に感謝を伝えたい』『中学校でも頑張るといった気持ちを表したい』といった答えが聞かれました。卒業式が感謝と決意を表す場であると理解し、元氣な返事や正しい姿勢が大切だと、自ら感じ、取り組むようになったのです」

同校では、このような指導すべてが「校内研究」であると考えている。つまり、日々の学校づくりと校内研究が一体の関係にある。

「校内研究と学校づくりがばらばらで、両方進めるのが大変」という声をよく聞きますが、本校ではそのようなことは全くありません。日常の指導も教師全員で協力し合いながら進めます。日々続けていることが校内研究なのです」（青山先生）

学級全員が納得するまで考える授業を目指す

毎日の授業では、「子どもが何をどのように考えたか」という視点を大切にしている。

「本校では、日常場面すべてが研究の場であると捉えた上で、とりわけ授業を重視しています。授業でも目指しているのは、意欲的



村形啓行 Murakata Hiroyuki
天童市立高嶺小学校校長
「子どもが生き生きと過ごせる、小規模校の良さを生かした子ども中心の学校をつくりたい」



戸田一彦 Toda Kazuhiko
天童市立高嶺小学校教頭
「子どもと教師の姿をよく見て、自分たちの取り組みの手応えを喜び合える学校を目指す」



堀川一男 Horikawa Kazuo
天童市立高嶺小学校教務主任。「絶対の愛が子どもを変え、教師に思いがあれば、子どもは心を開いて変わっていく」



青山紀子 Aoyama Noriko
天童市立高嶺小学校研究主任。6学年担任。「子どものことを決め付けず、とことん理解しようとする気持ちを忘れずにいたい」



田中美香 Tanaka Mika
天童市立高嶺小学校研究副主任。2学年担任。「いつでも子どもに語りかける。授業以外でもたくさんの会話をしたい」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

に追求し、考え抜き、意見を主張できる子どもの育成です」(村形校長)

自分自身で考えて答えを追求していく姿勢は、子どもだけでなく、教師にとっても重要であるというのが、同校の考えだ。

「教育にマニュアルはありません。どうすればより良くなるかを常に考える教師集団でありたいと思っています。教師自身も自分の姿を振り返り、自問自答することが私たちの研究の基本です」(青山先生)

2008年度の研究主題を考える際には、次のような反省が挙げられた。「どの子ども粘り強く取り組む授業になっているか」「はきはきと話す子どもの意見に『分かった』気持ちになっていないか」「教師にとって都合のよい意見だけで授業を進めていなかったか」といった点だ。

これらを踏まえて重点を置いたのは、「学級全員の子どもが『納得』するまでとことん考える授業づくり」だ。

取り組みと成果

事前研究会で

「みんなの授業」として考える

授業づくりの「確認」の場として活用するのが、年4回実施する授業研究会だ。授業づくりのポイントや子どもの実態を改めて振り

図1 授業研究会の概要

● 年4回の授業研究会

1回につき、高学年と低学年の担任各1人が授業を公開。事前研究会と事後研究会を行う。

● 夏休みの1日研修

毎年、テーマは異なる。宿泊して教育についてじっくり語り合うこともある。

■ 事前研究会 ■

低学年の担任と高学年の担任に分かれ、合計3～6時間をかけて、指導案などについて話し合う。

工夫点

- 授業者の提案する指導案の良し悪しではなく、子どもが考えを深められる指導の流れになっているかを全員で考える。これが授業者だけでなく、「みんなの授業」という意識を生む。
- 校務などの都合で途中から参加しても良いなど、気軽に参加できる雰囲気を大切にしている。

■ 事後研究会 ■

「授業を語る会」という名称で、全員が一堂に会して1時間程度話し合う。

工夫点

- 授業者と、事前研究会で指導案づくりに関わった教師1人とが、授業について自由に話し合い、他の教師も話に加わっていき、全体での話し合いに発展させる。
- 授業者への評価ではなく、事前研究会で考えた内容を基に、「自分の授業」として、子どもの発言や姿について考える。

返り、目指す子ども像に迫る教師の「かまえ」を学校全体で共有する場と位置付ける。戸田一彦教頭は、その意義を次のように語る。

「日常の教育活動すべてが研究であり、授業研究会はその一部ですが、新しく来た先生も含め、研究の方向性を子どもの姿で確認し合う場としてはとても重要です。形式的にならないようにしています」

授業研究会は年4回、事前研究会と事後研究会をセットで実施する(図1)。事前研究会、事後研究会共に「みんなの授業」として「子どもにとって授業はどう見えるのか」を考えることが特徴だ。

「『みんなの授業』という意識を持ってれば、たとえ授業が上手いかなかったとして

も、授業者だけの責任ではなく、皆で反省をして、原因を明らかにしようとする話し合いになります。授業者も反省点を包み隠さずに話せるので、授業改善にとっても有効です」(戸田教頭)

07年度までは、授業研究会での教科を特定していなかったために議論が多岐にわたることがあり、08年度からは算数の授業に焦点を当てている。しかし、算数はあくまで切り口だと、戸田教頭は説明する。

「算数を選んだのは、算数の指導法に課題があるからではなく、『何をどのような手順で考えているか』といった子どもの考えが見えやすい教科だからです。算数の授業で子どもを見取ったり、考えを表現させたりする方

つづけたくなる授業研究

図2

「研究集録」「各学年の実践」に書かれている要素

1. 子どもたちへの願い
子どもの実態と目指している姿など

2. 授業実践で明らかになったこと
指導案などは書かず、授業後に実践者が感じたことを書く

3. 1年間の実践を振り返って学んだこと
年間を通じての気付きや反省、今後の願いなどを自由に記述。「答えだけに目が行っていた」「まだまだ褒めることが足りない」など率直な言葉での振り返りも多い

「授業を語る会」という名称について、「教師がそれぞれ授業に対する考えや思いを自由に語り合える場にした」と、戸田教頭は説明する。司会者を立てず、教師2人が語り合いを始める形式にも同校の思いが現れている。「最初から全体で話すより、2人の会話形式の方が、授業者が感想や反省を率直に話せま

法は、他教科や日常のあらゆる場面に生かすことができます」

また、同校の研究集録の「各学年の実践」には各担任の「1年間の振り返り」が、それぞれの観点、言葉で書かれている(図2)。

「足りなかったことを含めて率直に書くと

事後研究会は「授業を語る会」

め、教師にとってはつらい作業ですが、課題をしっかりと見つめることで少しずつ研究を積み重ねられていますと感じます」(青山先生)

同校の「研究集録」はとてもシンプルだ。「各学年の実践」は1学級につきA3見開き1ページ。「研究を形式的なものにしたい」という同校の姿勢が感じられる *高橋小学校 平成20年度「研究集録」より

師がそれぞれ授業に対する考えや思いを自由に語り合える場にした」と、戸田教頭は説明する。司会者を立てず、教師2人が語り合いを始める形式にも同校の思いが現れている。「最初から全体で話すより、2人の会話形式の方が、授業者が感想や反省を率直に話せま

す。「A君の発言に皆がつけられてしまいました」「あの発話で流れが変わりましたね」などと話を進めるうちに、他の先生方が次々に入ってきます。事前研究会で内容を十分に共有しているため、どの先生も「あそこが上手くないかなかったのはなぜだろう」などと、自分の授業として、子どもの姿についてとことん話し合います」(青山先生)

学級全員が納得するまで考える授業を目指すことが共有できているため、事後研究会でも「子どもにとってどのような授業だったか」という議題から外れることはない。「課題は子どもの中にすんなりと落ちたか」「課題解決に向かって、どのように考えたか」「共同思考への導き方は良かったか」などを話し合うことが多い。このような事前研究会、事後研究会を重ねることで課題を焦点化させたり、子どもの言葉を大切にすることで子どもが納得した学びを得られたりする手応えがつかめてきた。

授業研究会で活発に議論できる土壌は、日常の関係から生まれている。他の教師が教室に入って授業を見学するのは、同校ではよくある光景だ。子どもの様子を中心として、気付いたことを伝える。同校に赴任して3年目という研究副主任の田中美香先生(当時)は次のように話す。

「初めは、『自分だけでクラスをまともなればいけない』という気負いがありました。

しかし、いろいろな先生が授業中に教室に入ってきて、後から『Aさんの発言、良かったね』などと声を掛けてもらうのは、とても勉強になりますし、『皆で一緒に子どもを見ている』という安心感も生まれました」

教師の安心感や信頼感が育まれていることが、更に研究をより良いものへと導いている。

◎ 成果を支える要因

子どもの変容を実感して取り組む

理念を伝えるだけでは、全員が本気になって研究に取り組むのは難しい。子どもの変化を通して「納得」しながら研究を進めることが重要だと、田中先生は話す。

「最初は子どもが考えるのを待つ指導が理解できず、指示したい気持ちを抑えられないこともありました。しかし、少し時間が掛かりましたが、そのような指導の方が子どもの中に残るものが大きいことに気付き、納得して取り組めるようになりました」

6年生の修学旅行でも変化した子どもの姿が見られたと青山先生は言う。

「班で自由行動をした時に、教師はほとんど指示をする必要がありませんでした。旅館の方が驚いていたほどです。自分たちで考え、行動する姿勢が身に付いているのだと、とてもうれしくなりました」

すべての教師が全校児童の担任

同校では、「すべての教師が全校児童を見取る」という方針を共有している。異なる視点から多角的に子どもを見取れるだけでなく、担任が1人で問題を抱え込まずに済む。

「『今日、A君がこんなことをしました』と話した時に、『A君、随分、成長しましたね』などと、周りの先生に受け止めてもらえるのはうれしいものです。話したいという気持ちも生まれて、情報共有がどんどん進んでいきます。子どもについての悩みなども共感して聞いてもらえると、『悩んでいるのは私だけではないんだ』と、とても気が楽になります」(青山先生)

管理職が教師をつなげていく

日常的に子どもについて話し合う雰囲気作りは、管理職の日頃のかかわりが大きい。

「『先生のクラスのAさんがこんなことをしていましたよ』と、子どもの名前を出すと、話が広がり、他の教師も会話に参加しやすくなります。日頃から子どもの姿をよく観察し、気付いたことは担任などに伝えるようにしています」(戸田教頭)

堀川先生は、「管理職の先生が具体的に名前を出して話し掛けてくれることで、普段から職員室で子どもの話をする空気が生まれていると思います」と話す。

村形校長が重視する

校長としての役割

まずは、先生方、そして子どもたちへの感謝の気持ちを忘れないことです。先生方が本当に一生懸命指導に当たっていることは常に身近で感じていますし、子どもの姿から学ぶことも尽きません。先生方が仕事に集中できて、その成果が子どもに還元されるように、校長として環境づくりに力を入れていきたいと考えています。

学校と保護者・地域を結び付けることも、校長の役割の一つです。先生方が子どもに対して強い熱意を持って取り組んでいることを、いかに効果的に発信して保護者や地域との協力関係を築いていくかという視点も大切にしたいと思います。

教師が自分の考えや感じたことを伝え合う関係は、日々の研究を通じてつくられてきた。次の段階として、指導方法についても更に深く話し合える関係をつくりたいと話す。

「どの先生にも培ってきた指導法がありま
すから、授業について何か指摘されることに
は抵抗感があるものです。しかし、目指す子
どもの姿をしっかりと共有していれば、それに
照らし合わせて互いに指摘できる関係をつく
ることは可能だと思います」(戸田教頭)